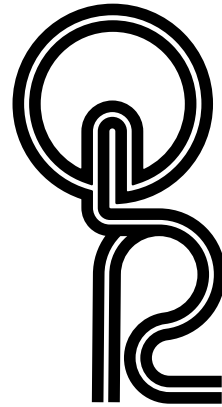


QR Newsletter

第四紀通信

Vol. 7 No. 2, 2000



写真： 丹那断層田代地区におけるGeoslicer調査で得た地層断面(1.5-3.5m)のはぎ取り作業。断層を含む地層の変形をはぎ取り標本として保存した。池田哲哉 撮影 (本文11頁参照)

Vol. 7 No. 2		April 1, 2000	
地球惑星科学関連学会合同大会	2	HOKUDAN2000 参加報告	10
日本第四紀学会 2000 年大会	4	丹那断層調査速報	11
WPGM2000 年大会 (第1報)	4	評議員会報告・幹事会報告	11
古人類学国際シンポジウム報告	8	会員消息	16
国際シンポジウム案内 (Bahama)	9		

2000年地球惑星科学関連学会合同大会（第3報）

1. 合同大会会期：2000年6月25日（日）～6月28日（水）
（参考：WPGM会期：2000年6月27日（火）～6月30日（金））
2. 会場：国立オリンピック記念青少年総合センター（〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1）
小田急線「参宮橋」駅下車 徒歩約7分
地下鉄千代田線「代々木公園」駅下車 徒歩約12分
3. 重要日程
 - ・4月7日（金）：プログラムのホームページ公開
 - ・4月14日（金）：事前参加登録，宿泊登録締め切り
4. 「第四紀」セッション（記号Qa）のプログラム
 - ・オーラルセッション 6月26日（月）午後 401 会場
 - ・ポスターセッション 6月26日（月）夕方予定

編集の都合上，プログラムの詳細は通信6月号（Vol7, No.3）に掲載します．なお，プログラムは4月7日（金）からWebに公開されます．「第四紀」セッションのプログラムについて前もって知りたい方は，地球惑星科学関連学会合同大会ホームページ [<http://mc-net.jtbcom.co.jp/earth2000/place.html>] で確認してください．

5. 合同大会全体のスケジュール

会場名：IC= 国際交流棟会議室，その他は研修センター棟の部屋番号を示します。（C101 = 1階，C304 = 3階）各項目は，セッション短縮名を示します．標準時間帯：9:00-12:30，14:00-17:30（詳細は合同大会ホームページを参照して下さい）

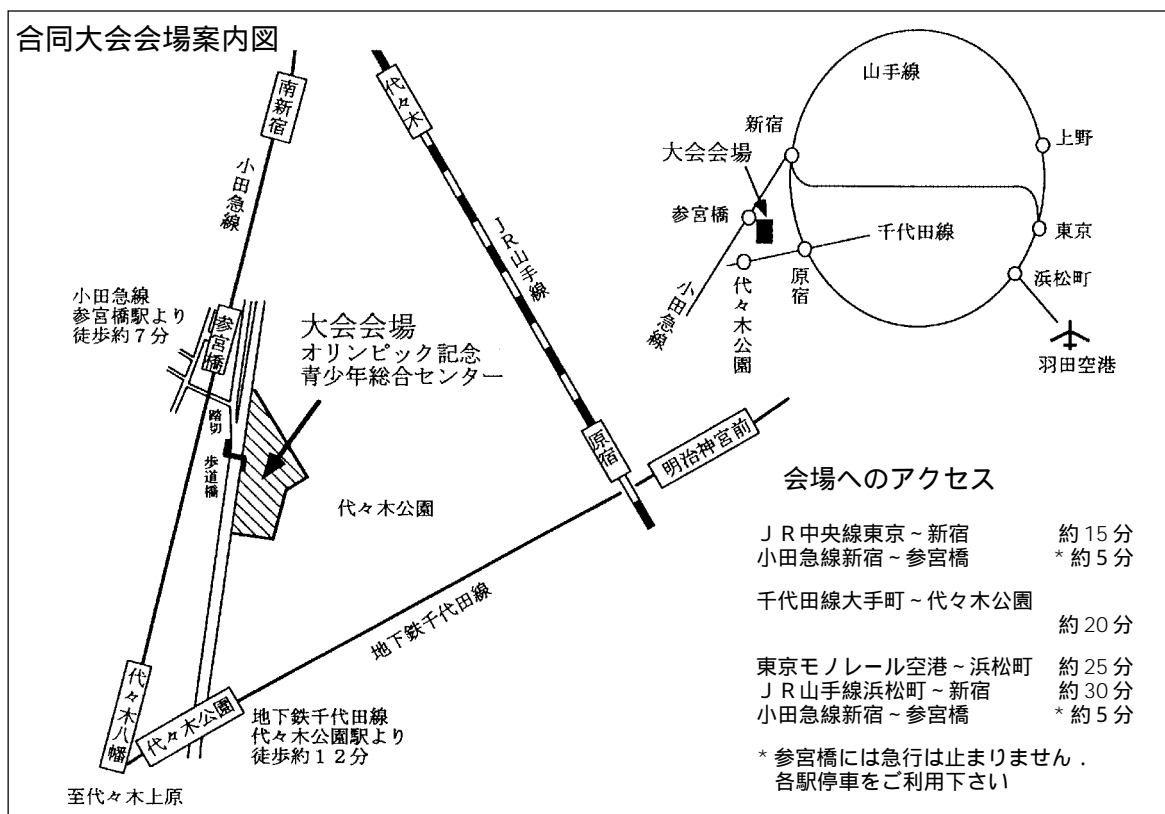
・オーラルセッション

会場	6月25日（日）午前	6月25日（日）午後	6月26日（月）午前	6月26日（月）午後
IC	Aa 地球史	Aa 地球史	Ab 地球内部物性・ 深部構造	Ab 地球内部物性・ 深部構造
101			Da 地殻変動	Da 地殻変動 Db 測地技術
102	Pa 天体核物理と 太陽系科学	Xa 青少年	Pa 天体核物理と 太陽系科学	Sd 半球観測研究の進展
304	Ka マントルプロセス		Kb オフィオライト	Pb 惑星物質科学
309	Ea 磁気圏・電離圏		Ea 磁気圏・電離圏	Ea 磁気圏・電離圏
310	Eb 電離圏・熱圏 ・中間圏	Eb 電離圏・熱圏 ・中間圏	Eb 電離圏・熱圏 ・中間圏	Ed 対流圏・成層圏
311	Va マグマ	Va マグマ	Va マグマ	Ag 地震関連電磁気現象
401			Ac 放射性廃棄物 地層処分	Qa 第四紀
402			Ad 地学教育	Ee 宇宙プラズマ
403			Ma 地惑物質科学	Ma 地惑物質科学
405			Ca バクテリアバイオ マーカー	Cb 地球表層炭素循環
409			Ec 古地磁気・岩石磁気	Ec 古地磁気・岩石磁気
416			Vb 火山活動	Vb 火山活動
417			Sb 強震動／災害	Sb 強震動／災害
501	Sa 地震発生の物理		Sc 地震諸現象 ／地震一般	Se 地殻構造
513	Ga 変形微細構造・物性		Gb 古気候・古海洋	Gb 古気候・古海洋
307			Ae データの嵐	Ah 対流
415			Af 衝突	Gc 地質一般

会場	6月27日(火) 午前	6月27日(火) 午後	6月28日(水) 午前	6月28日(水) 午後
IC	Ee 宇宙プラズマ	Ei 磁気圏構造とダイナミクス	Ei 磁気圏構造とダイナミクス	Ei 磁気圏構造とダイナミクス
101	Db 測地技術	Za フューチャー	Dc 測地理論	Ai 地震総合フロンティア研究
102	Pc 惑星科学		Pd 金星探査の科学	Pd 金星探査の科学
304				
309				
310				
311				
401				
402				
403				
405				
409	Mb 鉱物物理化学		Mc 生命・水・鉱物相互作用	Mc 生命・水・鉱物相互作用
416	Sf リソスフェアの温度構造		Si 地震計測 / 解析法	SI 活断層と古地震
417	Sg 地盤構造 / 震動		Sj 地震発生帯	Sj 地震発生帯
501	Sh サイモテクトニクス		Sk 地震活動	Sk 地震活動
513	Eg 太陽圏		Pe 木星型惑星	Pf リング・ディスク系
307				
415	Eh 地球内部電磁気			

・ポスターセッション

各セッションは、口頭およびポスター発表に分かれますが、両発表は同日に行われるようにプログラムが組んであります。第四紀セッション(Qa)は、口頭・ポスター発表とも6月26日(月)に予定されています。



第四紀学会 2000 年大会のお知らせ (第 2 報)

1. 日時, 開催場所の概要
(2000 年 8 月 23 日 ~ 27 日 千葉県立中央博物館, 国立歴史民俗博物館)
2. 発表の申し込み (締め切り 6 月 16 日 (金))
3. シンポジウム (企画中)
4. 巡検の概要 (企画中, 申し込みは次号)
5. 普及講演会 (企画中)

1. 日時, 開催場所の概要

プレシンポジウム (於 千葉県立中央博物館)

共 催 : 千葉県立中央博物館「中央博物館自然誌シンポジウム」

日 程 : 2000 年 (平成 12) 年 8 月 23 日 (水)

実行委員 : 岡崎浩子・江口誠一

連絡先 : 岡崎浩子

千葉県立中央博物館 (ホームページ : <http://www.chiba-muse.or.jp>)

〒260-8682 千葉市中央区青葉町 9552

Tel 043-265-3111 Fax 043-266-2481

e-mail: kohiroko@chiba-muse.or.jp

研究発表大会及びシンポジウム + 巡検

日 程 : 2000 年 (平成 12) 年 8 月 24 日 (木) ~ 27 日 (日)

開催場所 : 国立歴史民俗博物館講堂, ガイダンスルーム, 大会議室

実行委員会 : 委員長: 辻 誠一郎

委員: 春成秀樹, 今村峯雄, 西本豊弘, 青山宏夫, ほか

連絡先 : 辻 誠一郎

国立歴史民俗博物館 (ホームページ : <http://www.rekihaku.ac.jp>)

〒285-8502 千葉県佐倉市城内町 117

Tel 043-486-0123 (内線 421, 481) Fax 040-486-4299

WPGM (Western Pacific Geophysics Meeting) 2000 年大会 のお知らせ (第 1 報)

会 期 : 2000 年 6 月 27 日 (火) ~ 30 日 (金)

会 場 : 国立オリンピック記念青少年総合センター

(地球惑星科学関連学会 2000 年合同大会と同会場で日程をずらして開催されます)

主 催 : American Geophysical Union

参加登録など, 詳細は AGU のホームページをご覧ください。

<http://www.agu.org/meetings>

なお, 要旨の投稿は 3 月 16 日に締め切られました。参加登録の締め切りは 5 月 12 日 (金) です。

WPGM2000 年大会事務局からの連絡が遅れたため, 同大会案内の掲載が遅れました。なお, 地球惑星科学関連学会合同大会に登録されている本会会員には, 2000 年合同大会登録事務局から 2 月中旬に電子メールでお知らせが届いています。

- 8月23日(水) プレシンポジウム
- 8月24日(木) 一般研究発表, ポスター展示, 夕方: 評議員会
- 8月25日(金) 一般研究発表, ポスター展示, 総会, 夕方: 懇親会
- 8月26日(土) シンポジウム
- 8月27日(日) 巡検, 及び普及講演会(企画中)

2. 発表の申し込み

2-1. 一般研究発表の申し込み

今大会では、一般研究発表をオーラル・セッションとポスター・セッションの2つに区分します。ポスターの掲示は終日可能です。

一般研究発表での講演を希望される方はp.7にある「発表申込用紙」(コピーでよい)に所定の事項を記入の上、「2-3. 講演要旨の原稿の書き方」にしたがった写真製版可能な原稿及びそのコピー1部を、6月16日(金)までに(必着厳守)行事委員までお送りください。原稿の行事委員へ到着をもって原稿の受け付けといたします。一般研究発表では1人一件のみの発表が可能です。オーラル・セッションの発表時間は1人およそ12分(質問時間を除く)程度を予定しています(発表件数によって変更の可能性有り)。発表時間を厳守していただくために、スライド・OHPの使用は合計で8枚以内とさせていただきます。十分な説明や討論を希望する方には、ポスター・セッションへの申し込みをお勧めいたします。昨年同様にポスター発表の口頭ショートサマリー発表を行う予定です(各2-3分)。オーラル・セッション、ポスターセッションともに講演要旨集に2ページ執筆して下さい。オーラルセッションでのスクリーンは2幕用意しますので、スライドとOHPを組み合わせて2つ使用可能です。なお、申し込み用紙には、新たに連絡先としてファックス番号と電子メールアドレスを加えました。連絡を円滑にするために、是非ご記入下さい。

なお、シンポジウムでは放射性炭素年代関連のテーマをとり上げます。一般発表でもこれに関連したテーマを歓迎します。

要旨集原稿の送付先

〒646-8602 名古屋市千種区不老町 名古屋大学年代測定総合研究センター
日本第四紀学会行事委員 中村俊夫 宛
TEL: 052-789-3082 FAX: 052-789-3092 E-mail: g44466a@nucc.cc.nagoya-u.ac.jp
(送付先は実行委員会ではありません。お間違い無きようご注意ください。)

2-2. シンポジウム(プレシンポジウムを含む)の原稿提出

シンポジウム(プレシンポジウムを含む)で発表される方は、「2-3. 講演要旨の原稿の書き方」にしたがった写真製版可能な原稿およびそのコピーに、「発表申込用紙」(コピーでよい)を添えて、6月16日(金)までに上記の行事委員までお送りください。原稿枚数は2ページまたは4ページをお願いします。

2-3. 講演要旨の原稿の書き方

原稿用紙は、発表者各自が用意したA4版白紙を、横書き・縦置きで使用してください。左右各2.5cm、上端3.0cm、下端3.5cmは空白にしてください。表題・著者名は、p.7のように和文表題・著者名(所属)、英文著者名・表題の順に書いてください。和文表題は、1行目の左側を1.5cmあけて(左端から4.0cm)左詰めで書いてください。2行以上にわたる場合でも、1.5cmあけて左詰めで続けてください。

和文著者名は、和文表題の後改行して、発表者を右端に右詰めで書いてください。2行以上にわたる場合でも右詰めにしてください。所属は和文著者名の後にカッコをい

れて簡潔に書いてください。

英文著者名・表題は、和文著者名の後改行して、左詰め著者名・表題の順に「;」でつなげて書いてください(所属は不要)。本文は英文表題の次の1行をあけて書き始めてください。行数・字数は自由ですが、36行・35字程度を目安としてください。不明な場合は昨年 の要旨集を参考にしてください。本年も同一仕様です。

ワープロ使用の場合は濃く印字してください。手書きの場合は黒色インクまたは黒色ボールペンを使用し、濃く細く書いてください。手書き図表の場合は黒インクを使用し原稿用紙に直接書くか、あるいは青色方眼紙・白紙・トレーシングペーパーなどに清書して枠内に貼ってください。図が原稿の上下端、左右端の空白部分にかからないようご注意ください。印刷時にA4版の原稿がB5版に縮小されますので、図の縮尺については「何分の1」という表現はしないで、必ずスケールを入れてください。

3. シンポジウム

3-1. プレシンポジウム

『房総の第四紀の海水準変動とテクトニクス』(仮題)

内容: 房総半島は第四紀の堆積物および地形が広く連続的に分布し、層序学、堆積学、地形学、古生物学的に重要な地域であることはよく知られています。最近では、シーケンス層序を導入した研究や詳細な年代測定や地質調査に基づいたテクトニクスと堆積物、テクトニクスと地形発達研究などさらに多くの新しい報告がなされてきています。このミニシンポジウムでは、それらの報告を中心に房総の第四紀の地層および地形の発達とそれらを支配する海水準変動とテクトニクスについての発表を予定しています。(プログラム内容は検討中)

3-2. シンポジウム

『21世紀の年代観 炭素年から暦年へ』(仮題)

(プログラム内容は検討中)

4. 巡検の概要

以下の内容で現在企画中です。

テーマ: 『房総半島の地層と地形から読む海水準変動とテクトニクス』(仮題)

案内者: 岡崎浩子(千葉県立中央博物館), 中里裕臣(農業工学研究所),

宮内崇裕(千葉大), ほか

(巡検のコース、集合・解散の時刻、場所は検討中)

5. 普及講演会

(企画中)

『第四紀露頭集 - 日本のテフラ』 ブックセール

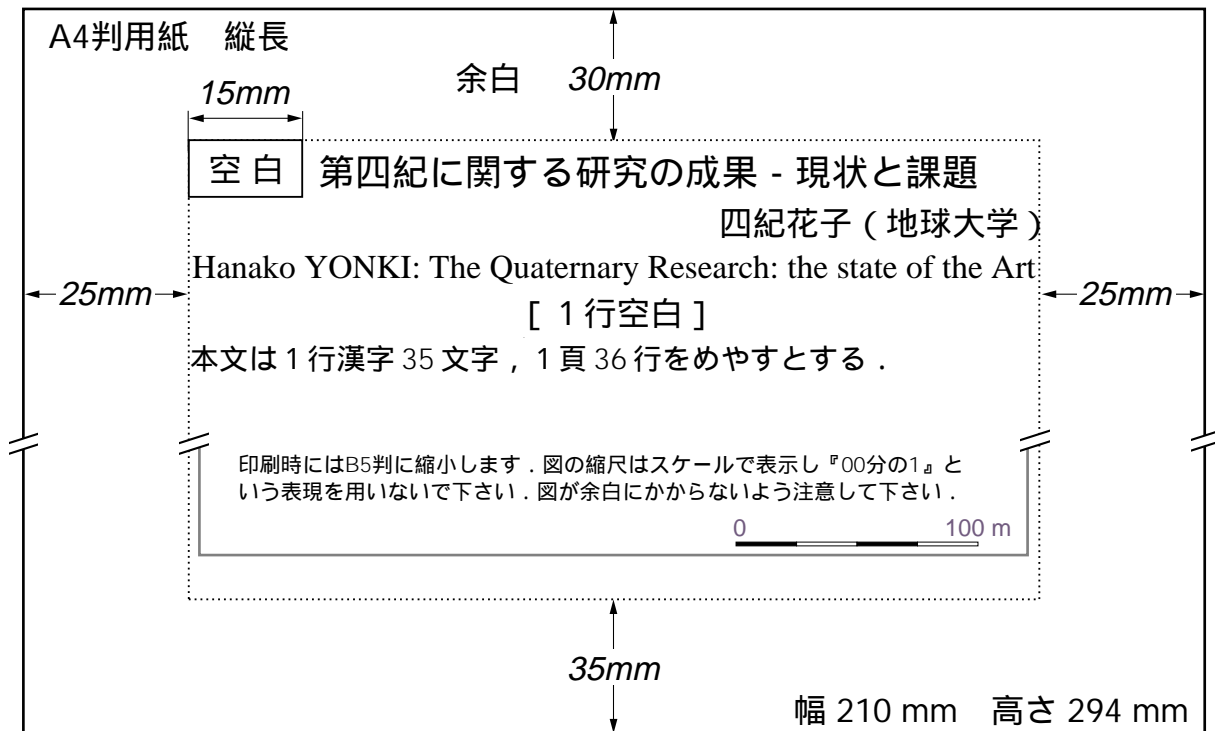
日本第四紀学会 40周年特別企画『第四紀露頭集 - 日本のテフラ』は発刊より学会内外から好評を博してきましたが、すでに刊行より2年以上を経過しました。新鮮な成果をできるだけ早い時期に活用していただくことを期して、下記のセール価格で販売することにしました。

一冊 1,500円・50冊以上一括購入の場合は一冊 1,000円

ファックスか葉書に送付先・冊数を明記して下記へ申し込んで下さい。

〒285-8502 千葉県佐倉市城内町117

国立歴史民族博物館 辻 誠一郎 Fax: 043-486-4299



きりとせん

発表申し込み要旨

氏名 (所属)			
題目			
発表内容 講演要旨には 掲載しません			
連絡先	〒		
	Phone		Fax
	e-mail		
発表種別	一般研究発表		シンポジウム
をつける	オーラルセッション	どちらでもよい	ポスターセッション
スライド・ OHPの使用 をつける	スライド (8 枚以内)	スライド + OHP (8 枚以内)	OHP (8 枚以内)

北京原人第1号頭骨発見70周年記念古人類学国際シンポジウム参加報告

河村善也（愛知教育大学地学教室）
樽野博幸（大阪市立自然史博物館）

本誌の第5巻第4号（1998年7月）にFirst Circular が紹介された表記の国際シンポジウム（International Symposium on Palaeoanthropology in Commemoration of the 70th Anniversary of the Discovery of the First Skull of Peking Man at Zhoukoudian）が北京市の中国科学院古脊椎動物古人類研究所を主な会場として開催された。このシンポジウムは、北京市西郊の周口店で1929年に北京原人の保存のよい頭骨化石が発見されて、ちょうど70年目にあたる1999年の10月12日から16日の期間に行われたものである。シンポジウム実行委員会から受け取った資料と筆者らの記録によれば、このシンポジウムには世界20カ国から100名を越える参加者があり、わが国からは15名が参加したが、この数は第1位の中国に次いで多い数であった。本会会員はそのうち9名で、半数以上を占めていた。これらの会員を本会の名簿をもとに専門分野で分けると、人類学3名、古生物学3名、考古学1名、地質学1名、地理学1名となり、参加した会員の専門分野が多岐にわたっていることがわかる。

シンポジウムの参加登録は、10月11日に古脊椎動物古人類研究所（以下研究所と略す）で行われ、翌12日の午前には天安門前にある人民大会堂の一室で開会式が行われた。開会式終了後、参加者はバスで研究所の向かいのホテルに移動し、昼食会を兼ねた歓迎パーティーに出席した。その後、参加者は研究所に行って、今回のシンポジウムに合わせて研究所内に新設された人類学関係の展示室「樹華（Shuhua）古人類館」の開会式に臨んだ。この展示室は現在、研究所に併設されている「中国古動物館」とともに一般に公開されているが、シンポジウム参加者は一般の見学者より前にこの展示室を見ることができた。展示室の見学後、参加者は研究所の一室に集まって、今回のシンポジウムの基調講演を聞いた。基調講演には、アジアの自然環境と人類進化に関するもの、ユーラシア各地の原人（*Homo erectus*）に関するもの、中国や韓国の旧石器に関するものなどがあつた。各部屋の分科会は、午前の部と午後の部に分かれているので、この日は4つの分科会があつたことになる。それぞれの分科会のテーマは「各大陸での最古の人類の兆候」、「年代と層序」、「*Homo erectus*の形態と系統および進化」、「前期旧石器文化」で、合計40題ほどの口頭発表が行われた。これらの発表

が行われた部屋のうち、一つの部屋の後部には掲示板が設けられており、それを使って同時に10題ほどのポスター発表も行われた。

翌14日は「Mid-conference Excursion」で、参加者の多くは北京市内観光と博物館見学に出かけた。翌15日は13日と同じ場所、同じ形式で同じ数の分科会が開かれ、やはり40題ほどの口頭発表が行われた。各分科会のテーマは「*Homo sapiens*の形態と系統および進化」、「中・後期旧石器文化」、「先史時代人類の行動」、「タフオノミー、古環境、古動物相」であった。また、13日と同じ場所で10題ほどのポスター発表が行われた。すべての講演の終了後、ポスター発表の行われた部屋で戦前の周口店発掘と北京原人のクリーニングの様子などを記録した古い映画フィルムから作られたビデオの上映会が行われた。

翌16日は、朝から現地討論会ということで、参加者はバスで周口店へ向かった。周口店遺跡のある龍骨山一帯はユネスコの世界文化遺産に指定され保護されているが、一般の観光客が訪れる観光地にもなっている。ここには、この遺跡で発掘された化石や遺跡などが展示されている「周口店遺址博物館」があり、その入口前には大きな北京原人の復元像がある（写真）。シンポジウム参加者は自由にこの博物館を見学するとともに、龍骨山の遊歩道を巡って、多数の北京原人化石が出土した第1地点（Locality 1）や新人の化石が出土した山頂洞（Uper Cave）などを見学した。見学の終わった参加者は博物館の手前にある建物で、D. Black, P. Teilhard de Chardin, F. Weidenreich, 楊鐘健, 裴文中など、戦前の周口店の発掘と出土した化石、遺跡の研究に貢献した研究者についての6題の講演を聞いた。この後この会場で閉会の挨拶があり、

写真

今回のシンポジウムは終了した。

なお、筆者らは参加しなかったが、本シンポジウムの前後に次の5つのコースの巡検が企画された。これらはいずれもが中国各地の更新世人類遺跡の見学を主な目的としたもので、(1)10月7日～11日の藍田遺跡や丁村遺跡など陝西省、山西省の遺跡を巡るコース、(2)10月8日～11日の河北省泥河湾盆地を巡るコース、(3)10月17日～24日の四川省龍骨坡遺跡や重慶自然博物館などを巡るコース、(4)10月17日～24日の広西壮族自治区百

色盆地の遺跡と貴州省大洞遺跡を巡るコース、(5)10月17日～24日の湯山遺跡、和県遺跡、繁昌遺跡など江蘇省と安徽省の遺跡を巡るコースである。巡検はいずれも参加者が少なく、(3)と(4)は中止されたと聞いている。

人類進化とそれを取り巻く自然環境の変化は、第四紀学の最も重要なテーマの一つであるが、今回のシンポジウムではそれらについての最新の研究成果に触れることができ、筆者らにとってたいへん有意義であった。

CARBONATES AT THE MILLENNIUM 10TH SYMPOSIUM ON THE GEOLOGY OF THE BAHAMAS AND OTHER CARBONATE REGIONS

JUNE 8-12, SAN SALVADOR ISLAND, BAHAMAS

Nine previous symposia have been highly successful in meeting the following objectives:

To provide a forum for the presentation of results of current geologic research being conducted throughout the Bahama Archipelago and geologically similar areas such as Florida, the Caribbean, and elsewhere.

To examine outcrops of Late Pleistocene and Holocene rocks and modern environments in the field.

To provide an informal setting to facilitate contacts and cooperation between geologists working in the Bahamas and geologically similar areas.

To promote the growth of knowledge in the general area of carbonates geology.

In recognition of the first meeting of the next millennium, the organizers wish to expand the scope of the meeting to include:

Research in modern and ancient carbonate systems that is applied to modern ecological issues.

Research in carbonate systems that includes a strong outreach component.

KEYNOTE SPEAKER:

Dr. Pamela Hallock

Department of Marine Science, University of South Florida, St. Petersburg, Florida

"Coral Reefs in the 21st Century: Is the Past the Key to the Future?"

Interested authors are invited to contribute to the symposium program by presenting papers and/or participating in a poster session. ABSTRACTS of proposed papers/posters should be submitted to both the organizer and one of the Program Co-Chairs. Deadline to submit single-page, single-spaced abstracts of 350 words or less is April 1, 1999. Also send abstract copy on 3.5" disk in Word format to the organizer. Oral presentations will be limited to 30 minutes, including discussion.

www.geology.wright.edu/geology/events/symposium.html

Dr. B. J. Greenstein

Dept. of Geology Cornell College

600 1st St. West, Mt. Vernon, IA 52314

Ph: (319) 895-4307 Fax: (319) 895-5667

ccarney@desire.wright.edu

Dr. Cindy Carney

Dept. of Geological Sciences Wright State Univ.

Dayton, OH 45435

Ph: (937) 775-3455 Fax: (937) 775-3462

bgreenstein@cornell-iowa.edu

Hokudan International Symposium and School on Active Faulting 参加報告

石山 達也 (京都大学大学院理学研究科)

Hokudan International Symposium and School on Active Faulting (北淡国際活断層シンポジウム)は、2000年1月18日から26日にかけて、兵庫県津名郡北淡町の北淡町民センター・北淡町震災記念公園にて開催された。本シンポジウムは大きく分けて、公開学術シンポジウム(18日・19日)、スクール(20日～23日)および中央構造線活断層系の野外巡検(24日～26日)からなり、世界各国の活断層研究者による研究発表および討論が行われた。筆者はこのうち学術シンポジウムとスクールについて参加する機会を得たので、以下にその報告を行う。シンポジウムでは当然ながら英語が使用されたので、筆者の英語力でその全容が理解できたかどうか甚だ疑問である。不十分な点があることをご勘案頂きたい。

本シンポジウムは、1995年兵庫県南部地震(いわゆる阪神淡路大震災)からちょうど5年が経過するのを契機に行われた。会場となった北淡町は、野島断層と呼ばれる地表地震断層が出現した場所であり、数多くの犠牲者を出した町である。あれから5年たった当地は復旧が進み、あの悲惨な状況を外面上はおおむね克服したように思われた。会場の一角には地表地震断層の一部が天然記念物として保存された立派な施設があり、地震発生直後の生々しい状況が再現されている。昨年4月の開館以来、この施設には全国からの入館者が200万人を突破したとのことで、シンポ期間中の休日にも数多くの人々が施設を訪れ、賑わいをみせていた。

さて、6日間にわたるシンポジウム・スクールには、アジア・アメリカ・ヨーロッパを中心に世界各国から約150名の活断層研究者・学生が参加した。このような集まりの楽しみは、自分の研究分野(註:筆者の研究分野は変動地形学のみ)以外の成果を目にすることができることである。発表者の研究分野は地形・地質学、地球化学、地震学、強震動地震学などと多岐にわたっており、活断層が研究分野ではなく研究対象であることをよく示している。実際、筆者が興味をひかれた発表のひとつは、構造地質学を専門とするK. Mueller氏(コロラド大学)のポスターであった。彼はTransverse RangesのWheeler Ridgeなどを例に取り上げ、地形面の変形と地質構造の発達を関連づける内容の発表を行っていた。地形面の変形の認定について若干の疑問を感じたが、自分と同じ興味をもって研究をしている人と出会えたのは何よりも嬉しかったし、当然筆者よりも構造地質学に造詣が深いMueller氏の発表は、地質構造発達のメカニズムについて今後の研究の参考にすべき点が多かった。彼も私の研究に興味を示してくれたらしく、現在もお互いにメールのやりとりをしている。彼のほかにも¹⁰Be年代測定法のL. Siame氏やクーロン破壊関数のR. Stein氏など、多様な分野の興味深い発表を聴くことができた。

シンポ期間中の生活もまた楽しいものであった。われわれ日本人学生の参加者は期間中の大半をコテージで宿泊した。朝7時に起床して20kmほど離れた会場に向かい、朝9時から夜6時まで会場運営のお手伝いを兼ねながらシンポジウムに参加し、夕食後はアルコールを交えて夜中まで研究・その他について語り合う、という一週間であった。これまで顔見知りであったり、論文等で名前だけは知っていた、同世代の研究者の人達との仲を深めることができた。惜しむらくは、参加者が古地震の研究者に偏っていたように思われることである。特に国内参加者のうち、地形・地質学以外の分野に身をおく同世代の研究者がほとんどいなかったのは残念であった。日本では「活断層」はまだまだ認知不足なのだろうか。地球物理学系の大学院に在籍する筆者としては身につまされる思いである。

何はともあれ、このシンポジウムで過ごした一週間は筆者にとって実に貴重な体験であった。これだけの研究者を集められた、中田 高・奥村晃史両先生をはじめシンポジウム実行委員会のご苦労は計り知れないものがあるし、600ページを超える立派な予稿集にはこのシンポにかける並々ならぬ思いが感じられた。事務局の後藤秀昭氏をはじめとする広島大学院生の諸氏は、大会前からシンポジウムの準備・運営にご尽力された。各大学から集まった大学院生・学部生の諸氏も、シンポジウムの運営に重要な役割を担われた。また、北淡町の関係者の方々は、シンポジウムの準備・運営に携われたことはもちろん、参加者がシンポジウム期間を快適に過ごす環境を整えて下さった。最後になりましたが、上記の方々をはじめとするシンポジウム関係者に感謝いたします。

丹那断層田代地区における3Dトレンチおよび地層抜き取り調査

遠田 晋次(東京大学地震研究所)

東京大学地震研究所, 広島大学文学部, 京都大学理学研究科, 山梨大学教育学部による調査グループは, 2000年2月に静岡県函南町田代地区の火雷神社北方約300mの水田で丹那断層の発掘調査を行った。今回の調査では, 浅部での細溝状トレンチ, マイクロトレンチ, 平面発掘(3Dトレンチ)とジオスライサーによる深部の地層抜き取りの組み合わせにより, 地質情報を大規模に破壊することなく, 断層の地表形態や横ずれ変位量を復元することを目的とした。また, 多数の地層断面・平面の観察によるイベントの回数や時期の精度向上も考慮した。その結果, 丹那断層の過去4回のイベントの時期, 断層形態および最近2回の地震時の横ずれ変位量を検出することができた。

調査では最初に, 断層を横切る数条のトレンチと断層に平行な2条のトレンチ(深さはそれぞれ約1.5m)を掘削し, 地表付近の断層位置を明らかにした。写真にみられるように, トレンチのほぼ中央部に横ずれ断層に典型的なフラワー構造が認められた。これらの地層断面の観察に基づき, 断層を横切るチャンネル堆積物など, 変位基準となるような地質構造に着目し, 断層変位量の検出を試みた。そのため, 考古学的発掘による断層の平面観察を行うとともに, 深さ30~50cm, 幅20~50cmのマイクロトレンチを適宜掘削し, 多数の断面を露出させた。平面観察で認められた断層の走向は, 調査地周辺の丹那断層の一般走向に対して北から反時計回りに10°~40°ずれており, ミ型に雁行配列していた。チャンネル状・トラフ状の礫層の復元により, 1930年の北伊豆地震時の左横ずれ40~50cm, 西落ち20~30cmの変位量を検出した。これは, 地震当時の変位記載と整合的である。また, これに先行するイベントも含めた過去2回の地震による左横ずれ変位量は 80 ± 10 cmと推定された。すなわち, 先行するイベントの変位量は北伊豆地震によるものと同程度であった可能性が高い。過去2回のイベントに限っては, 田代地区では固有の変位量で特徴づけられる。

地表付近の発掘調査に加えて, トレンチ底面より, 幅40cm, 長さ4mのジオスライサーを4箇所打ち込み, 地層を抜き取った。断層帯直下の抜き取りでは, ほぼ鉛直に傾斜する断層を不攪乱で抜き取ることに成功し, 鉛直累積変位と深部地質構造を明らかにした。その結果, 約2,800年前に堆積した砂沢スコリア層以降, 1930年の北伊豆地震を含めて4回の地震イベントの証拠が見いだされた。これは, 南の丹那盆地でのトレンチ調査結果(丹那断層発掘調査研究グループ, 1983)とおおむね整合的である。この最近4回の地震による累積上下変位量は西落ち2.5m以上である。現在, 個々のイベントの年代を特定するために, 地層の ^{14}C 年代を測定中である。



1999年日本第四紀学会第2回評議員会議事録

日時: 2000年1月29日(土) 11:00 ~ 13:00

場所: 東京都立大学 人文学部1階143号室

議長: 岩田修二

出席者: 米倉伸之(会長), 熊井久雄(副会長), 真野勝友(幹事長), 上杉 陽, 遠藤邦彦, 太田陽子, 町田 洋, 菊地隆男, 斎藤文紀, 酒井潤一, 竹村恵二, 福澤仁之, 松島義章, 吉川周作, 岩田修二, 海津正倫, 奥村晃史, 小泉武栄, 鈴木毅彦, 山崎晴雄, 糸魚川淳二, 河村善也, 土 隆一, 松浦秀治, 小野 昭, 小田静夫, 春成秀爾, 兵頭政幸, 中村俊夫, 陶野郁雄(以上評議員), 中川庸幸(学会事務センター), 委任状11通

米倉伸之会長の挨拶の後, 岩田修二評議員を議長に選出し, 下記の報告と審議が行われた。

I 報告事項

I-1 1999年度事業中間報告

I-1-1 庶務

(1) 会員動向(2000年12月31日現在): 正会員1862名(うち, 学生費会員166名, 海外会員26名を含む), 名誉会員 5名, 賛助会員14社, 団体購読会員106団体。逝去会員 松島三晃氏。1999年7月29日現在と比べて, 正会員-1名(うち, 学生費会員+3名)他は同じ。

(2) 1999年度第1回評議員会を1999年8月23日に京都

大学において開催した。出席者25名、委任状11通。議長：河村善也。1999年度大会を京都大学で開催した。議長：宮武頼夫。これらの詳細は、議事録として第四紀通信6巻5号に掲載した。

- (3) 平成12年度の科研費出版助成金の申請は、ここ数年当学会の応募結果は不採択になっており、これまでのこうした事情を念頭に検討した結果、今年度は応募を見送ることにした。注：このことによって当学会の財政に特に影響はないこと、また、独自の学会活動を展開する上で制約を受けないほうが得策であろう、などの見解による。
- (4) (財)科学技術広報財団から広報誌「科学技術ジャーナル」の「学協会NOW」への投稿依頼に応じて、日本第四紀学会の紹介記事を投稿し、学会活動の広報に努めた。記事は10月号に掲載された。
- (5) 引用許可の受付、会員名簿整理、寄贈図書への受付(1999年8月から12月末までに16冊)を行った。
- (6) 以下のシンポジウム・講演会等の協賛や後援を行った。
 - 「北淡国際活断層シンポジウム」への後援(実行委員会会長 中田 高(2000年1月17日~26日))
 - 第11回海洋調査技術学会研究成果発表会への協賛(会長 寺本俊彦(1999年11月4~5日))
 - 第15回ESR応用計測研究会への協賛(幹事 池谷元伺さんからの文書)(1999年12月3-4日)
- (7) 1999年度日本第四紀学会論文賞に向けて、推薦論文の募集を第四紀通信に掲載準備し、論文賞選考委員の選挙を行った。米倉伸之会長から推薦された11名の候補者に対して、評議員による選挙を行った結果、以下の5名が選出された。菊地隆男、小野 昭、中田高、広岡公夫、犬塚則久。次点 永塚鎮男。広岡会員が職務多忙のため辞退したことにより、論文賞選考委員会は、菊地隆男、小野 昭、中田 高、犬塚則久、永塚鎮男の以上5名で構成されることとなった。
- (8) 日本学術会議第18期会員候補者1名と推薦人3名の選出に対して、評議員による投票を行った結果、会員候補者 米倉伸之、次点 鎮西清高、推薦人 太田陽子、熊井久雄、遠藤邦彦、次点 町田 洋が選出された。
- (9) 第四紀研究バックナンバーの冊数確認を学会事務センター分について行った。
- (10) 研究委員会の募集を第四紀通信を通じて行い、以下の5件の申請があった。

継続

- (1) テフラ研究委員会：1999年度(1年間)
 - 代表者名：鈴木毅彦
 - 参考：テフラ研究委員会(1992-1995:助成金交付、1996-1998:継続)
- (2) アジア太平洋層序研究委員会：1999年度~2002年度(4年間)
 - 代表者名：熊井久雄
 - 参考：アジア太平洋層序研究委員会(1996-1998:助成金交付)

新規

- (1) 海面変化・海岸環境変遷研究委員会：1999年度~2002年度(4年間)
 - 代表者：大村明雄
- (2) 古土壌研究委員会：1999年度-2002年度(4年間)
 - 代表者：坂上寛一
- (3) ネオテクトニクス研究委員会：1999年度~2002

年度(4年間)

代表者名：奥村晃史

I-1-2 行事

- (1) 1999年大会(総会、シンポジウム、一般研究発表、懇親会、巡検、普及講演会)を京都大学理学研究科にて1999年8月23~27日に開催した。23~24日は、一般研究発表(口頭発表47件、ポスター発表40件)、評議員会、総会、懇親会を行った。25日は、シンポジウム「活構造と都市地盤・災害 - 阪神大震災から5年目の発信」(オーガナイザー：岡田篤正・竹村恵二・杉山雄一・三田村宗樹・増田富士雄) (話題提供14件)を実施し、26日には京都市国際交流会館イベントホールにて「尾池和夫氏による普及講演「京都における歴史地震」と岡田篤正会員による「京都盆地における活断層」及び巡検「近畿三角帯北部の歴史地震と地殻変動」(案内者：寒川 旭・小松原琢・水野清秀)を行った。23~25日における登録者は、282名(内会員207名、非会員75名)、普及講演会における登録者は241名であった。全体で参加登録を行った人数は、523名(内会員212名、非会員311名)であった。今大会から初めて参加費をとったが、問題なく進捗し、大会費用の一部を学会に還元することができた。
- (2) 2000年6月25~28日に国立オリンピック記念青少年総合センターで行われる地球惑星科学関連学会2000年合同大会に参加するため、「第四紀」のセッション提案などの準備を行った。同じく国立オリンピック記念青少年総合センターで、2000年6月27~29日に開催されるAGUのWPGM(Western Pacific Geophysics Meeting)の参加に関して準備を行った。
- (3) 日本第四紀学会2000年大会の総会、シンポジウム、巡検等の準備を行った。大会は、2000年8月23日に千葉県立中央博物館で、24~27日に千葉県佐倉市の国立歴史民俗博物館で行われる(実行委員長：辻 誠一郎)。23日にはプレシンポジウム「房総の第四紀の海水準変動とテクトニクス(仮題)」(オーガナイザー：岡崎浩子ほか)、24~25日に評議員会、一般研究発表会、総会、懇親会、26日にシンポジウム「21世紀の年代観 - 炭素年から暦年へ(仮題)」(オーガナイザー：春成秀爾・今村峯雄・中村俊夫・西本豊弘・辻 誠一郎)を予定している。また、27日には岡崎浩子ほかの案内による巡検を準備中である。
- (4) 日本第四紀学会2001年大会の会場選定を行い、鹿児島大学理学研究科に打診を行い、内諾を得た。

I-1-3 企画

- (1) 日本第四紀学会ミニシンポジウム「日本列島の旧石器動物群をめぐる諸問題」を企画準備した。開催日時は、2000年1月29日(土)13:30~17:10、会場は東京都立大学。河村善也、小野 昭、吉川周作会員による講演と総合討論。
- (2) 第8回日本第四紀学会講習会を、鹿児島県国分市上野原遺跡で開催予定。日程は2000年2月末以降の予定。テーマは「縄文時代の技術の復元 - 土器の文様復元、食物調理法を調べる」で、講師は会員の上村俊雄(鹿児島大学)、富田逸郎(鹿児島県立埋蔵文化財センター)、新東晃一(同センター)、宮田栄二(同センター)の各氏を予定。

1-1-4 渉外

加盟学会連合等の状況について

(1) 地球惑星科学関連学会

2000年6月25日～6月28日に開催予定の地球惑星科学関連学会2000年合同学会に対して第四紀学会が応募したセッション「第四紀」は採用され、6月26日午後15時に時間枠が設定された。参加登録および予稿集登録は1月12日より開始され、予稿集登録・参加登録の締め切りはそれぞれ、2月29日、4月14日である。予稿集登録は、昨年と同じく締め切りが近づくに従って投稿料が高くなるシステムであるが、第四紀通信の発行日との関係で、第四紀学会会員には投稿料に関して不利な点がある。但し昨年度の参加者には、メールにて、事前に投稿システムに関する情報が連絡されている。

2001年以降の合同大会については、大学L O Cによる開催は現在のところ大変難しく、複数の組織に所属する有志によるO Cの組織化が現実的とされており、そのための準備が進行している。

(2) 自然史学会連合

総会が1999年10月16日に国立科学博物館新宿分館で開催され、次期代表に森脇和郎氏(総合研究大学院大学)が選出され、活動内容と予算案の報告がなされた。その後、新運営委員の構成と運営規則改正がなされ、第四紀学会でもそれらを承認した。また、自然史学会連合が日本学術会議から「広報協力学術団体」に指定された。

(3) 地質科学関連学協会

地質科学関連学協会連合は今年発足予定であり、学術的活動に加え、地質科学の発展に資する活動、地質科学者の社会的責任を果たす活動を進めるために結成される。このような主旨と具体的な活動方針についての賛同依頼が1999年10月4日に第四紀学会によせられた。同連合の呼びかけに対して、第四紀学会として前向きに対応する予定である。

(4) 地球環境科学関連学会協議会

1999年12月17日に地球環境科学関連学会協議会(第4回)が開催された。現在、協議会に登録されている学会の数は20であるが、これで十分かどうかの議論がなされた。とくに社会科学・人文科学関連の学会との接点をどうもつかについて議論がなされた。

1-1-5 編集

(1) 第四紀研究の発行

1999年8月以降、38巻4号、5号、6号を刊行した。4号では原著論文4編、短報2編、書評4編を、5号は原著論文5編、資料1編、書評3編を、6号は「相模湾周辺の地震・火山とテクトニクス」特集号で論文12編をそれぞれ掲載した。

(2) 第四紀研究編集委員会の開催および編集作業の状況

1999年8月以降、9月11日、10月16日、12月11日および2000年1月22日の4回、筑波大学学校教育部で第四紀学会編集委員会を開催した。8月以降に受け付けた論文は原著は15編、短報3編、書評9編で、それ以前に投稿されたものを含めて原著33編、短報9編、書評9編について編集作業等を行った。その結果、2000年1月21日現在で、受理した論文は20編(原著9編、短報4編、書評7編)で、著者が取り下げた論文(書評)1編、不受理論文(書評)1編であった。

また、編集委員会で以下の事柄についてとくに議論を行い、いくつかについては確認事項とした。年代表記について意見を交わした。「¹⁴C yrs BP」もしくは「cal yrs BP」の表記にならうよう著者に知らせることになった。

論文受理後に著者校正時における原稿の修正を認めないことを再確認した。修正された場合には再投稿扱いとすることを確認した。

原図返却の取り扱いについて意見が出され、著者から返却要求のないものは処分することになった。

修士論文・卒業論文など公開されていない論文のデータは引用せず、そのデータのプライオリティを持っている人をできるだけ著者に加えてもらうように要望することを確認した。

投稿論文を学位申請の副論文にしたい希望があるが、論文審査の進行を早める努力をすることはあっても論文審査を甘くすることはないことを確認した。

学術研究成果促進費助成に関連して、欧文論文を増やす努力をする。また、外国人による投稿を促すことを努力する。

(3) INQUA 報告の掲載について

1999年にダーバンで開催されたINQUAの報告は39巻2号に掲載する予定で、町田 洋会員に取りまとめをお願いしている。内容は、会議の概要、総会・国際評議員会、研究委員会、セッション、巡検から構成される予定である。

1-1-6 広報

(1) 「第四紀通信(QR Newsletter)」Vol.6-5(1999年10月)、Vol.6-6(1999年12月)、を刊行した。

(2) 文部省学術情報センターのインターネットWWWサーバ上の日本第四紀学会ホームページを通じて広報活動を行った。

1-2 1999年度会計中間報告

1-3 第四紀研究連絡委員会報告

日本学術会議第四紀研究連絡委員会は、一般の方にはなじみ薄いようであるが、国際団体(International Union for Quaternary Research, 通称INQUA)との対応団体であり、第四紀研究に関する国際対応の機関であると同時に、ほかの国内研究連絡委員会との連絡、第四紀研究の進展、普及にあたって重要な任務を持っている。第四紀学会の方々もぜひこの委員会の役割を認識していただき、ご意見をいただきたいと願っている。INQUAに関連する記事は、INQUA要覧の翻訳を「第四紀研究」に掲載し、かつINQUAのニュースレターであるQuaternary Perspectiveを同誌に発行の都度掲載し、かつ国際行事なども同誌または「第四紀通信」にのせるなどして、周知を計っている。またINQUAの詳しい情報はホームページhttp://inqua.nlh.no/を参照していただきたい。

1999年度の活動報告

(1) シンポジウム：今期になって2回、1999年度には2回のシンポジウム(完新世古土壌に関するシンポジウムの主催、および北淡国際活断層シンポジウムの共催)を行った。シンポジウムの開催は今後引き続き行なう予定である。

(2) INQUAへの協力：第四紀学会と協力して最近10

- 年間の第四紀研究の進歩を取り扱った英文の「第四紀研究」特集号を発行し、1999年8月のINQUA会議の際に100部を各国代表者および執行部、研究委員会執行部のメンバーなどに配布した。また日本の活断層図、古土壌図、海岸線図などを会期中展示した。
- (3) INQUA会議での重要な事項：詳細は「第四紀研究」に掲載される。とくに重要な定款の改定は、加盟団体を国だけではなく、Geographical Regionを加えた点である。この定款の改定により、台湾の第四紀研究者グループが正式な加盟団体として承認された。
- (4) INQUAの研究委員会での日本人役員は下記の通り
海面変化・海岸環境研究委員会副委員長：太田陽子
ネオテクトニクス研究委員会書記：奥村晃史
層序研究委員会アジア・太平洋小委員会委員長：熊井久雄
- (5) INQUA大会での日本開催を検討するワーキンググループを第四紀学会と協力して設置し、第四紀研究連絡委員会のもとで活動を開始した。メンバーは、小野 昭、小野有五、太田陽子、熊井久雄、小池裕子、斎藤文紀、町田 洋、米倉伸之、委員長は太田陽子。この会議で、日本開催を前提として、1)従来の規模(参加者数、参加国数、シンポジウムの数、巡検の数など)を整理、2)開催可能な場所の検討、3)巡検についての近隣諸国との協力の検討、4)発表テーマをしばるか自由にするかなどの発表形態の検討などを行いつつある。近いうちに検討結果をまとめ、委員にいろいろな年代層の人を加えてより具体的な検討を進める。次回のINQUA会議は2003年であるので、その1年前までには成案をまとめられるようにしたい。
- (6) 次期研連委員の選出について
次期委員の選出に当たっては、選出母体となる各学会に次のようなことを考慮していただきたい旨の依頼をする。
- 1) 選出に当たっては第四紀研究に強い関心をもつ人を選んでほしい(各委員の委員会出席状況を付して選出の参考とする)。
 - 2) 同一機関から多数の委員を選出しないように配慮する。
 - 3) 2名分を保留して、INQUAの役員および第四紀学会の幹事会メンバーから選出する(両機関との連携を密にするため)。
 - 4) 女性委員が選出されるように配慮する(これは学術会議からの要望)。

II 審議事項

- II-1. 2000年大会、2001年大会について
- (1) 日本第四紀学会2000年大会の総会、シンポジウム、巡検等を、2000年8月23日に千葉県立中央博物館で、24～27日に千葉県佐倉市の国立歴史民俗博物館で行う(実行委員長：辻 誠一郎)。23日にはプレシンポジウム「房総の第四紀の海水準変動とテクトニクス(仮題)」(オーガナイザー：岡崎浩子ほか)、24～25日に評議員会、一般研究発表会、総会、懇親会、26日にシンポジウム「21世紀の年代観 - 炭素年から暦年へ(仮題)」(オーガナイザー：春成秀爾・今村峯雄・中村俊夫・西本豊弘・辻 誠一郎)を予定している。また、27日には岡崎浩子ほかの案内による巡検を準備中である。
- (2) 日本第四紀学会2001年大会を、鹿児島大学理学研究科で行う。(2001年8月1-3日大会・シンポ、4-5日巡検を予定)

II-2 研究委員会について

会則17条の特別委員会、及び研究委員会内規(1992年9月13日評議員会承認)に基づき、提案のあった以下の5件の研究委員会が承認された。

継続

- (1) テフラ研究委員会：1999年度(1年間)
代表者名：鈴木毅彦
参考：テフラ研究委員会(1992-1995:助成金交付、1996-1998:継続)
- (2) アジア太平洋層序研究委員会：1999年度～2002年度(4年間)
代表者名：熊井久雄
参考：アジア太平洋層序研究委員会(1996-1998:助成金交付)

新規

- (1) 海面変化・海岸環境変遷研究委員会：1999年度～2002年度(4年間)
代表者：大村明雄
- (2) 古土壌研究委員会：1999年度～2002年度(4年間)
代表者：坂上寛一
- (3) ネオテクトニクス研究委員会：1999年度～2002年度(4年間)
代表者名：奥村晃史

注：助成金交付は、継続(2)、新規(1)(2)(3)の合計4件。

1999-2000年度 第3回幹事会議事録

日時：1999年12月11日 10:30～13:00
場所：筑波大学学校教育課 合同会議室(E235)
出席者：米倉伸之、真野勝友、斎藤文紀、松浦秀治、小田静雄、鈴木毅彦、福澤仁之、竹村恵二、奥村晃史、太田陽子、中川庸幸
欠席：熊井久雄、中村俊夫、

1. 報告事項

<庶務> 資料配布；「科学技術ジャーナル10月号」の「学協会NOW」に掲載された第四紀学会の紹介記事。
1) 受け入れ図書8冊、2) 会員の受賞「第8回岩宿文化賞 佐藤宏之(東京大学)」第4回岩宿文化研究

奨励賞 東北日本の旧石器文化を語る会(代表 加藤稔)、3) 協賛依頼 ESR応用計測研究会から第15回ESR応用計測研究会(電子メールで幹事会内の承認後提出済み)。

- <会計> 1) 学会専用封筒の注文、2) 会誌・会報印刷費の現状報告、発送費を含めてやや支出増加気味。
<編集> 第四紀研究38巻6号の発行。39巻1号(ミニシンポ関連)は印刷中。その他の編集作業の現状報告。
<行事> 1) 第四紀学会2000年大会(千葉県佐倉市)の巡検は、ポスト巡検のみに変更になった。
<企画> 1) 第8回日本第四紀学会講習会「縄文時代の技術の復元」を2000年2月26-27日に鹿児島県国分市上野原遺跡で開催予定、2) 2000年1月29日開催

幹事会議事録

のミニシンポ「日本列島の旧石器動物群をめぐる諸問題」の開催準備状況報告,資料集を作成し,販売の予定.

< 渉外 > 1) 地球惑星科学関連学会2000年合同大会の準備状況の報告. 昨年同様に「第四紀」のセッションを提案し,承認される. 6月26日午後の予定, 2) 自然史学会連合から新運営委員構成の承認依頼, 運営規則改正の是非が届いていたが, 電子メールで幹事会内の承認後, すでに承認の回答済み, 3) 地質科学関連学協会からの学会連合の呼びかけに, 第四紀学会としては前向きに対処する旨回答した.

2. 審議事項

< 庶務 > 1) 日本第四紀学会論文賞受賞候補者の推薦についての第四紀通信原稿の確認, 会長から推薦があった論文賞選考委員について審議し, 2000年1月17日締めで評議員の投票を行うことになった. 2) 学術会議第18期会員候補者および推薦人の選出については例年どおり評議員による投票を行うこととし, 2000年1月17日締め切りで投票を行うことになった.

< 会計 > 1) ミニシンポジウム等において会員以外の講演者へ, 予算の許す範囲で旅費・謝金を支払うことにする. 支払いの規程については検討する.

< 編集 > 1) 大阪府熊取町からの町史への第四紀研究に掲載された論文の図の掲載願を許可された. 2) 神奈川県立生命の星・地球博物館から同博物館で開催した大会のシンポジウム特集号の販売希望を許可した. 3) 編集書記のfax機器が使用困難になってきているので, 編集委員会からの貸与備品として, 新規に購入することになった.

< 渉外 > 1) 地球惑星科学関連学会合同大会の2001年以降の大会運営に関して討議した.

< その他 > 1) 学会費滞納者については2000年1月の状況をみて, 催促状を送付することになった. 2) 第四紀研連から2001年1月の評議員会時にシンポを共催したいとの申し出と, 次期研連委員会委員の選出方法についての要望があった.

1999-2000 年度 第 4 回幹事会議事録

日 時: 2000年1月22日 11:00 ~ 13:00

場 所: 筑波大学学校教育課 合同会議室 (E235)

出席者: 米倉伸之, 熊井久雄, 真野勝友, 斎藤文紀, 鈴木毅彦, 福澤仁之, 松浦秀治, 中川庸幸

欠 席: 奥村晃史, 竹村恵二, 中村俊夫, 小田静夫, 太田陽子

1. 報告事項

< 庶務 > 1) 会員消息(1999年11月分), 2) 受け入れ図書 (3冊) 3) 日本第四紀学会論文賞選考委員の選挙結果, 上位から5名は菊地隆男, 小野 昭, 中田 高, 広岡公夫, 犬塚則久, 次点は永塚鎮男. 投票数35名. 4) 学術会議会員候補と推薦人の選挙結果. 会員候補 米倉伸之, 次点 鎮西清高, 推薦人 太田陽子, 熊井久雄, 遠藤邦彦, 推薦人予備者 町田 洋, 投票数33人. 5) 研究委員会の募集結果, 継続希望 (a) テフラ研究委員会(1年間), 代表者名: 鈴木毅彦, (b) アジア太平洋層序研究委員会: 1999年度~2002年度(4

年間), 代表者名: 熊井久雄, 新規希望(a) 海面変化・海岸環境変遷研究委員会: 1999年度~2002年度(4年間), 代表者: 大村明雄, (b) 古土壌研究委員会: 1999年度~2002年度(4年間), 代表者: 坂上寛一, (c) ネオテクトニクス研究委員会: 1999年度~2002年度(4年間), 代表者名: 奥村晃史. 6) 平成12年度分植物科学基金助成事業の案内

(締め切り12.04.30).

< 会計 > 1) 1999年度予算中間報告. 会費の納入状況は昨年と比べて順調である.

< 編集 > 1999年度前半の編集状況の報告. 現在受理後2-4ヶ月で印刷となっている.

< 行事 > 1) 第四紀学会2000年大会(千葉県佐倉市)の準備状況報告. 大会は, 2000年8月23日に千葉県立中央博物館で, 24~27日に千葉県佐倉市の国立歴史民俗博物館で行われる(実行委員長: 辻 誠一郎). 23日にはプレミニシンポジウム「房総の第四紀の海水準変動とテクトニクス(仮題)」(オーガナイザー: 岡崎浩子ほか), 24~25日に評議員会, 一般研究発表会, 総会, 懇親会, 26日にシンポジウム「21世紀の年代観 - 炭素年から暦年へ(仮題)」(オーガナイザー: 春成秀爾・今村峯雄・中村俊夫・西本豊弘・辻誠一郎)を予定している. また, 27日には岡崎浩子ほかの案内による巡検を準備中である.

< 企画 > 1) 第8回日本第四紀学会講習会「縄文時代の技術の復元」を2000年2月26-27日に鹿児島県国分市上野原遺跡で開催予定. 2) 1月29日に開催されるミニシンポの準備状況報告.

< 渉外 > 1) 地球惑星科学関連学会2000年合同大会の準備状況の報告. 参加登録が始まる. 2) 1999年12月17日に地球環境科学関連学会協議会(第4回)が開催され, とくに社会科学・人文科学関連の学会との接点をどうもつかにについて討論がなされた.

2. 審議事項

1) AGUからの第四紀研究掲載論文に関して転載許可があり, 許可した. 2) 研究委員会の募集結果に関して, 各提案委員会の申請事項を検討し, 5件を評議員会に提案することになった. 3) 1999年度第2回評議員会資料に関して討議した. 4) 学会費滞納者については2000年1月25日現在の状況をみて, 催促状を送付することになった.

1999-2000 年度 第 5 回幹事会議事録

日 時: 2000年1月29日(土) 10:30 ~ 11:00

場 所: 東京都立大学 人文学部1階143号室

出席者: 米倉伸之, 熊井久雄, 真野勝友, 斎藤文紀, 中村俊夫, 小田静夫, 鈴木毅彦, 福澤仁之, 松浦秀治, 奥村晃史, 竹村恵二, 太田陽子, 中川庸幸

1. 報告事項

< 企画 > 2000年2月末に予定していた第8回日本第四紀学会講習会は2000年4月以降に延期された.

2. 審議事項

第2回評議員会資料

第2回評議員会資料について最終確認を行った.

第四紀通信に原稿をお寄せ下さい

広島大学文学部地理学教室 奥村晃史 〒739-8522 東広島市鏡山1-2-3
kojiok@ipc.hiroshima-u.ac.jp Phone: 0824-246657 Fax: 0824-240320

発行スケジュールが変わりました!!

次号は5月上旬原稿締切 - 6月上旬発行予定です。
インターネットにアクセスできる方は第四紀学会ホームページ
<http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/qr/>で最新情報をチェックして下さい。